

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：43807  
 研究種目：基盤研究(C)（一般）  
 研究期間：2017～2022  
 課題番号：17K04297  
 研究課題名（和文）保育における子どもの喪失体験（あいまいな喪失含む）の課題および支援法開発の試み  
 研究課題名（英文）Problems and development of a support program in nursery schools for children with the experience of parental loss (including ambiguous loss)  
 研究代表者  
 加藤 恵美 (Kato, Emi)  
 静岡県立大学短期大学部・短期大学部・助教  
 研究者番号：50381314  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：災害・事故、病気・自殺などで親を喪失し、トラウマを抱える子どもも少なくない。新型コロナウイルス感染拡大によるDVや離婚の増加に伴い、“あいまいな喪失”（Boss 1999）を体験する子ども（以下：喪失体験児）も増えている今日、保育分野における喪失体験児への「心理社会的支援」の必要性を検討した。保育所保育士への面接及び質問紙調査実施の結果、保育士の多くは保護者の離婚による離別体験をした子どもの保育経験があり、個別支援をしつつ、保護者との離別という喪失体験支援に関する専門知識とスキルを学ぶ必要性を訴えていた。調査結果も踏まえ現職のための喪失体験児のレジリエンスを高める支援法構築のための知見を得た。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義の1つは養護と教育の一体的取り組みと保護者支援を専門性とする保育の本来的あり方において、保護者との離別による“あいまいな喪失”（Boss 1999）を体験する子どもへの心理社会的支援の必要性を、保育士の面接及び質問紙調査結果から明らかにしたこと。2つ目は調査結果も基盤とし親との離別に伴う悲嘆やトラウマを抱える子どものレジリエンスを高める支援法開発の知見を得たことである。  
 本課題「保育における子どもの喪失体験（あいまいな喪失含む）の課題および支援法開発の試み」が期せずして新型コロナウイルス感染拡大による“あいまいな喪失”という人間関係の問題が増加し社会問題と直結していることが顕著である。

研究成果の概要（英文）：Many children are traumatized by the loss of a parent due to disaster, accident, illness, or suicide. With the increase in domestic violence and divorce due to the spread of coronavirus infection, the number of children experiencing "ambiguous loss" (Boss 1999) has been increasing, and we examined the need for "psychosocial support" for children experiencing loss in the childcare field. As a result of interviews and a questionnaire survey of nursery school childcare workers, many of them had experience taking care of children who had experienced separation from their parents due to divorce, and they expressed the need to learn specialized knowledge and skills regarding support for children who have experienced loss due to separation from their parents while providing individualized support. Based on the results of the survey, findings were obtained for the construction of a support method to enhance the resilience of children who have experienced loss for the incumbent.

研究分野：社会福祉学

キーワード：あいまいな喪失 離婚 テキストマイニング

## 1. 研究開始当初の背景

国内では、2000年以降、親を失くした子どもを対象とした研究が見られるようになり(坂口2010)、子どもの死の概念や死別体験ケアなどの研究が行われている。東日本大震災後は、学校での実践研究(小林ら2011:2012)も多数見られる。保育分野では、保育所での被災児のグリーフを描いた絵本(八木澤ら2014)が出版されているが、喪失体験児へのグリーフケアの研究は見当たらない(伊藤印刷中)。一方、海外では、子ども時代に親を喪失する経験がもたらす心理的、生理的作用が、短期的及び長期的影響を及ぼすことが実証されており、特に、喪失後のストレスに対し、子どもがその対処資源を持たない場合や、子どもの喪の行為の制限と感情表現の制止は、子どもが精神的健康問題を抱えるリスクを高めることになる(シュトレーベら2014)。また、親との死別後、適応的対処及び発達をする子どものレジリエンスとその保護資源の研究が進展している。死別対処モデルは、段階モデルが否定され、「意味の再構成」モデル(Neimeyer2001)が提唱されており、大切な人の死という出来事がそれ以前の意味構造と一致しない場合、意味の生成活動を通して再構成する必要があるとしている。喪失理論においては、「あいまいな喪失」(Boss1999)概念が広まり、災害や自殺、行方不明、離婚など、親密な人の身体的・心理的存在と不在に「あいまい性」がある喪失体験を包括的に捉えることができる。本邦では、「あいまいな喪失」体験児への支援の研究(石井ら2012:加藤2012:友田2012)はなされているが、東日本大震災で親を失くした子どものグリーフケア活動および研究を行っている高橋(2013)は、喪失体験児への包括的・体系的な支援は行われていないと述べている。

## 2. 研究の目的

災害・事故も多い今日、また病気・自殺などで親を喪失し、トラウマを抱える子どもも少なくない。離婚の増加に伴い、「あいまいな喪失」(Boss1999)を体験する子どもも増えている。しかし保育現場において、親との離別に伴う悲嘆やトラウマを抱える子どもの支援が重要にも関わらず、殆ど議論されてこなかった。事実、保育士養成課程内容に子どもの喪失体験への支援の方策は一切述べられていない。そこで本研究では、(1)保育現場における子どもの喪失体験について、保育士への聞き取りで実態と課題を明らかにし【研究1】、(2)喪失体験児のトラウマに対するレジリエンスを高める支援法の開発を試みる【研究2】。これは、養護と教育の一体的取り組みによる保育の本来のあり方を実現するものであり、東日本大震災後の今、他領域との連携課題である。

本研究の目的は次の4点である。

保育士養成課程の新領域「子どもの喪失体験によるトラウマへの支援」の提案

子どもにとり親を失うことは発達上の危機である。しかるに保育士養成課程内容には、子どもの喪失体験への支援方策については一切述べられていない。本研究では、保育士は、子どもが新たな能力や人間関係を「獲得」することへの支援とともに、子どもの「喪失」体験によるトラウマ体験への支援という新たな保育の領域を担う必要性を明らかにする。

子どもの喪失体験を包括的に捉える「あいまいな喪失」(Boss1999)理論に準拠

子どもの喪失体験を捉える視点として、「あいまいな喪失」理論に準拠する。親との離別は、例えば、自殺は死別であっても社会の承認を得にくく、遺された子どもは親の死を意味づけできないまま凍結した悲嘆を抱え(石井ら2012)、また、生死が判明しない行方不明、離婚による生別も、親の身体的・心理的存在性に曖昧さがある喪失体験であり、子どもはトラウマ的なストレスを抱える可能性がある。よって、親の喪失要因を病死や事故死などの「明確な喪失」に限定せず、「あいまいな喪失」を含めて包括的に捉えることを試みる。

子どもがもつレジリエンス(Bonanno2001)にフォーカスした予防的視点による支援法の開発

喪失体験児のトラウマ体験への支援法の開発において、子どもがもつレジリエンスに着目する。レジリエンスは、危機後の回復の一部ではなく(Boss2002)、むしろ再生していく成長や肯定的な感情を伴った連続性のある健康の機能である(Bonanno2001)。特に「あいまいな喪失」は、終結の見えないトラウマ的なストレスであるため、レジリエンスを高めることが重要である。子どものレジリエンスの保護資源は、自己効力感、自尊心、感情表現、肯定的自己感などで、これらを促進する支援法を開発する。一方、レジリエンスのある子どもには介入の必要が無いことも支援法開発における重要な視点である。

ホスピタル・プレイ(松平2010)とグループ表現セラピー(井上ら2016)を用いた支援法の開発

ホスピタル・プレイ(以下HP)とグループ表現セラピーを統合し、独自の支援方法を開発する。HPは日常の遊びおよび子どもの発達と個性に合わせた遊びの提案をし、感情の表出を促して治療体験の肯定化を図るものである。グループ表現セラピーは、安全な場所で、遊びの感覚で、非言語ツールによる表現活動を通して、レジリエンスを育むものである。両者は子どもの特性と発達の促進およびトラウマ体験へのケアに適しており、これらを統合した支援法の開発を行う。

### 3．研究の方法

保育現場における親との離別による子どものトラウマ体験への支援の実態と課題を踏まえた上で、保育士の喪失体験児のトラウマ体験への支援法を開発することを目的とする。【初年度】の研究では、保育士を対象として、保育現場における喪失体験児の実態、トラウマケアの実施の有無、保育士の子どもへのトラウマケアに関するコンピテンシーの現状について聞き取りおよび質問紙調査を実施し、結果を SPSS およびテキストマイニングにて分析し、実態と課題を明らかにする。【2 年次】は、調査研究の成果を踏まえ、子どものトラウマケアとレジリエンスを高める支援法を開発を行う。【3 年次】は、支援法開発の継続および保育士を対象として開発した支援法をプログラム化および試行する。研究成果は学会発表、論文などを通して社会に広く発信する。

### 4．研究成果

災害・事故、病気・自殺などで親を喪失し、トラウマを抱える子どもも少なくない。コロナウイルス感染拡大による DV や離婚の増加に伴い、“あいまいな喪失”(Boss 1999)を体験する子ども(以下;喪失体験児)も増えている今日、保育分野における喪失体験児への「心理社会的支援」の必要性を検討した。保育所保育士への面接及び質問紙調査実施の結果、保育士の多くは保護者の離婚による離別体験をした子どもの保育経験があり、個別支援をしつつ、保護者との離別という喪失体験支援に関する専門知識とスキルを学ぶ必要性を訴えていた。調査結果も踏まえ現職のための喪失体験児のレジリエンスを高める支援法構築のための知見を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加藤恵美・いとうたけひこ・井上孝代	4. 巻 14
2. 論文標題 親との離別という “ あいまいな喪失 ” 体験をした保育園児へのパンデミック下の心理社会的支援の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 マクロ・カウンセリング研究	6. 最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤恵美 井上孝代 いとうたけひこ	4. 巻 13
2. 論文標題 保育所保育士の “ 喪失体験児保育 ” に関する意識：ある保育研究会における事例検討を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マクロ・カウンセリング研究	6. 最初と最後の頁 2-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤恵美 いとうたけひこ 井上孝代	4. 巻 35-W
2. 論文標題 親の離婚を体験した子どもの支援に関する保育士の意識調査：現職・保育学生を対象とする “ あいまいな喪失 ” 体験児への支援教育プログラム構築に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡県立大学短期大学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 加藤恵美・いとうたけひこ・井上孝代
2. 発表標題 自死遺児の語りにおける自己開示・発見・リカバリー：テキストマイニングによる手記『自殺って言えなかった。』の混合研究法的分析
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤恵美・いとうたけひこ・井上孝代
2. 発表標題 あいまいな喪失を体験した子どもへの保育士による支援の実態と課題：質問紙調査の量的分析結果から
3. 学会等名 日本応用心理学会第86回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤恵美・岡本悠・日高共子・井上孝代・いとうたけひこ
2. 発表標題 “喪失体験児”の理解と支援に向けて：社会福祉士養成課程短大生を対象とした授業内ワークショップの試み
3. 学会等名 The 7th International Conference of Expressive Art Psychotherapy (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤恵美 いとうたけひこ 井上孝代
2. 発表標題 保育現場における親を喪失した子どもへの支援の実態と課題
3. 学会等名 日本応用心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤恵美 いとうたけひこ 井上孝代
2. 発表標題 離婚後の子どもの“荒れ”への保育：あいまいな喪失の一事例
3. 学会等名 日本カウンセリング学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

加藤 恵美 (Emi Kato) - researchmap <a href="https://researchmap.jp/emikato2019">https://researchmap.jp/emikato2019</a> 井上 孝代 (Takayo Inoue) - researchmap <a href="https://researchmap.jp/takayoinoue">https://researchmap.jp/takayoinoue</a> いとう たけひこ (Takehiko Ito) - researchmap <a href="https://researchmap.jp/itotakehikowako">https://researchmap.jp/itotakehikowako</a> いとうたけひこ研究室 <a href="https://www.itotakehiko.com/papers/">https://www.itotakehiko.com/papers/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	井上 孝代  (Inoue Takayo)  (30242225)	明治学院大学・国際平和研究所・研究員   (32683)	
研究 分担者	伊藤 武彦  (Ito takehiko)  (60176344)	和光大学・現代人間学部・教授   (32688)	
研究 分担者	松平 千佳  (Matsudaira Chika)  (70310901)	静岡県立大学短期大学部・その他部局等・准教授   (43807)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	岡本 悠  (Okamoto Hisashi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	日高 共子  (Hidaka Kyoko)		
研究協力者	津田 友理香  (Tsuda Yurika)		
研究協力者	片岡 真紀  (Kataoka Maki)		
研究協力者	布施 利穂  (Fuse Riho)		
研究協力者	瀧 彩栄  (Taki Ayae)		
研究協力者	小玉 紗織  (Kodama Saori)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------